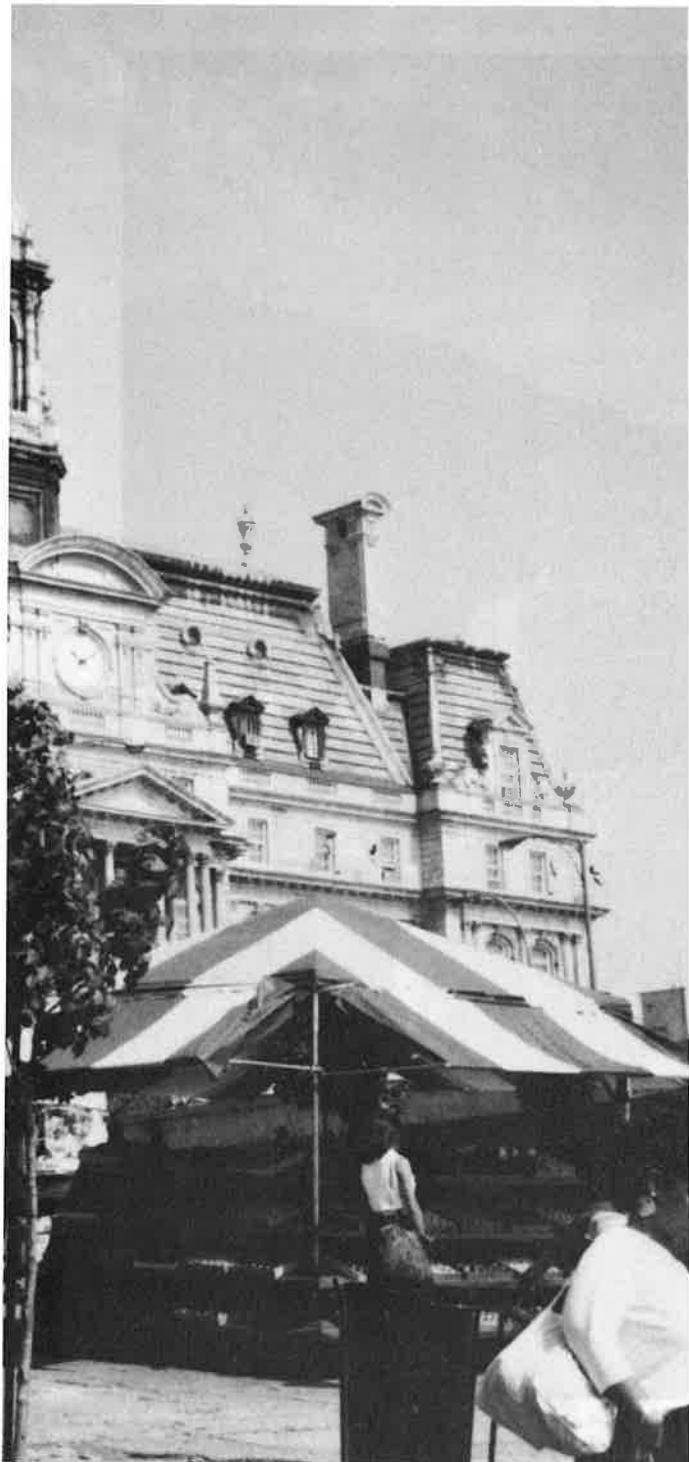


アメリカ留学体験記

視野を広める海外生活

島崎義孝





今から十年ほど前、私がまだ学生だったころ、当時、花園大学の学長をしておられた山田無文老師がニューヨークの大菩薩禪堂の開基式に臨まれたついでに、アメリカやメキシコ各地の仏教グループの接心にも招かれ、指導をしてこちらに招かれた。そのときの模様がある新聞に掲載され私はその記事を非常に興味をもって読んだ。「あちらの禪が本物」とか「悩みのない日本人の修行」という見出しがついており、内心で反発もし、また刺激も受けた。

次第に根を下ろす

そのころは一時の雨後の筈のごときビート・ゼンやドラッグ・ゼンがなりをひそめ、ようやくアメリカの人たちが自分たちの手で組織的な集団づくりを始めた頃だった。山田老師の目を通じてだが、その報告には、いきいきとした彼らの活動ぶりが直に伝わってくるようなりア

リティがあった。私がアメリカの仏教事情に関心をもち、今回の留学を志した一因がこのあたりにあることはまちがいない。

そして、実際にアメリカに足を運んで、そこでの仏教グループの人たちと接してみると、以前わたしが日本で聞いていた耳目をそば立たせるような人に会つたり、特殊なやり方を目のあたりにすることはまったくなかつた。ごくふつうに社会生活を営んでいる人たちが任意に接心に参加したり、小さなグループの定期的な集まりに通つてているというぐあいで、淡淡と坐禅が続けられていた。ひとくちで言えば釈尊の教えが徐々にではあるが試行錯誤を繰り返しながらも、次第に根をおろしつつあるという印象をもつた。

ある人に言わせれば、D・T・スズキの書物は今や古典に属するという。ネイティブ・スピーカーによって米語で著された仏教語もこんにちでは夥しい数にのぼる。もちろんこのように

多くの書物が出版される背景には多くの読者の需要があるのであって、特定の人達を除けば教養書の枠を出るわけではないが、日本で「禅」に興味をもつ人たちが知っている程度の事柄はかれらもすでに心得ている。

日本の型は破るべき

永年アメリカで仏教の指導に携わつてこられた某師家が、どういうわけで坐禅をするのか門下のアメリカ人に尋ねたところ、しばらく考え

たあげく、よくわからないがとにかく坐る必要を感じるから坐るんだと答えたそうである。これはすごく素直なこたえ方だと思うし、正しい受けとり方だといえる。決して軽々しい態度ではない。

宗といえば、常人では耐えられそうにない厳しい修行が課され非常に高踏的な達人宗教のように考へられている。このことは一面では事実であろうが、他面では多くの人々を誤まらせてきたことも否めない。実際にこの地でアメリカ人の相手をしている人の口から「アメリカ人に禅はわからない」といった発言が一再ならずされきたが、私は一種の同感を覚えながらも、それは日本の禅教の型に拘泥しすぎではないかと思う。

鈴木大拙博士が「禅と日本文化」で紹介したような仏教の形態をアメリカという風土にそのまま移植することは不可能だし、それは本に竹をつぐようなもので実情にそぐわない。イザヤ・ベンダサン氏が日本人をキリスト教徒も仏教徒も、あるいはなんの宗教にもかかわっていない人も含めて日本教徒と呼んでいるように、アメリカにもそれなりにかれらが底辺で依拠し

てゐる社会・文化の枠組があるはずだ。

もつとも、アメリカの人々のなかにも、日本の

禅仏教やそれによつてもたらされた文化現象の絶対的な礼讃者が数多くいるらしい。禅堂で

障子や畳が坐禅をする環境をつくり出すのに適当だとして取り入れるのは十分に利用のあることだとしても、高価な香をくゆらせながら、どう見ても禅マインドの発露とは見えない墨絵や書を描いて悦に入つてゐる一部の人々を見ていふと、鼻もちならぬスノップを覚えてしまう。これなどは日本型禅仏教の皮相な直輸入なのだが、かれらの趣向もさることながら、先生格にあたるわが国の側からの伝達の仕方にも大きな問題があつたといえる。

不用意に「禅」ということばを頻繁に用いることによつて、無意識のうちにそういうしたものを使体化してこなかつただろうか。ふつうに坐禅に親しんでゐる人でも、時としてゼンという

ことばを好んで使いたがる傾向があるが、われわれも注意しなければならぬ問題だと思う。

米独自の形態を期待

仏教、すなわち釈尊の教えというものをつきつめれば、普遍的に人間がかえている生老病死というサイクルのなかでの現実の“生”的意味に対する全人的な問いに対するこたえであり、また坐禅はそれを自己に血肉化して体得・理解する具体的な方法である。私はこの点だけをしつかり踏まえておけばいいと考えてゐる。後はそれぞれの環境で変化していくとしてもしかたがない。中国で生まれた仏教の新しい方法が日本で新たな展開をとげたように、アメリカではまた独自の形態を生む。一方、伝統は新しい血液を受けることによつて活性化するのだと信じたい。

私はアメリカでの生活を通じて多くの真摯な

友人を得たと思う。かれらが私から学ぶものがあるしもあるとすれば何かを学んだであろうが、私は私でかれらのひたむきな態度に大いに啓発されてきたことは表白しておきたい。私の留学体験はまだ一年程でしかないが、実際にアメリカ人と語り、あるいは共に坐禅を組むことにより、大きな刺激を受けてきた。

特に、海外生活は視野を大きく広めてくれる点で意義がある。やはり今後の宗教者は、仏教徒だけでなくあらゆる宗教の人々が、自分たちの教派や自分たちの世界観だけにとじこもつてはいけないと思う。また、世界を舞台にして活動していくべきであると痛感している。

(善光寺海外留学僧、アメリカ派遣)

